

無アクセントの史的位置づけ

高山, 倫明
九州大学大学院人文科学研究院文学部門国語学国文学 : 教授 : 日本語学

<https://doi.org/10.15017/16874>

出版情報 : 文学研究. 107, pp.1-15, 2010-03-01. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン :
権利関係 :



無アクセントの史的位置づけ

高山 倫明

1 はじめに

現代日本語諸方言のアクセントの構造とその地理的分布を概観すると、比較的複雑な構造を持ち、区別される型の多い京阪式アクセントが列島のほぼ中央に位置し、相対的に単純な東京式アクセントがその両脇に、さらに単純な無アクセント（一型アクセント）が周辺部に分布する、いわゆる周圈的分布を示している。それらは、比較方法と過去の中央語のアクセントを反映する文献資料に照らして、概ね多型から順次型の区別を減じていったものと考えられ、無アクセントはその最終形態で最も新しく現れた形式であろうというのが今日の通説である。

一方、その周圈的分布を重くみて、逆に無アクセントを多型より古層に位置づけようという試みもある。小泉保（1998）が、

「東北と九州の大地域は別として、八丈島、大井川の上流、福井の一部、四国の西端、トカラ列島内といった僻地に限って、なぜアクセントの型が消滅するまで早急に進化してしまったのであろうか。いや、むしろ奥地や隔絶した島であれば複雑な古形を忠実に守っていてもよいではないか。一型進化論ではこの問題に対して説明がつかない。

もし、方言周圈論の主旨にそえば、こうした一型式の地域こそ日本語の古層をよく保存していることになるから、ここで発想を逆転させて、一型アクセントこそ縄文語の韻律的特性であると考えれば、右に示した地域こそ純朴にその特色を守り通したことになる。」

と述べ、山口幸洋（1998）は、

「この地図だけから率直に、周縁部に位置する一型アクセントが相対的に「古い方言（古代日本語）」だと指摘した学者にS55年のラムゼイ・S・R、S56年のW・A・グロータースがある。グロータースの「大和を中心とし、その両側の無アクセント地帯」という配置の外側にアイヌと、隼民族があるという話は言語学を超える見解であったので、一応除外するとしても、アクセントの問題について両氏ははっきりと「ABA分布（拡張してABCB A分布）のAが古形」と指摘した。」（第12章第8節「言語地理学的考察」）

「本稿はこうして、一型アクセント＝原始日本語アクセント説を検討する段になった。なお、縄文人、原始日本語の呼称に代えて、筆者は前弥生人、前弥生語の言葉を用いるものとする。

第一の根拠は、やはり言語地理学である。

柳田国男以来の方言圏論を持ち出すまでもなく、日本列島を舞台として繰り広げられる言語の遠隔分布が「相対的古形」であるというテーゼはやはり尊重されるべきものと思う。」（第12章第9節「不対応の方言——もう一つの原始日本語」）

と論じている。比較方法と文献資料に依拠した通説に対する、言語地理学的観点からのアンチテーゼであると言えよう。とくに後者においては、

「全国一型アクセントにある、多型（有弁別）からの「型の減少」に由来する変形だという既製言語史観は、それが当時「戦前」の皇国史観と関係があるとまでいうのは唐突だとしても、日本語のアクセント史観すべてに文献中心、中央絶対思想があった。個人の責任に帰することは出来ないが、一度は疑って良い。」（第12章第2節「曖昧アクセントの規定——共時論と通時論の混同」）

といった厳しい通説批判が随所に展開され、またそれに共鳴する杉崎好洋（2008）は、

「ところが、四半世紀前に関連諸学で否定されている「単一民族神話」

に未だに依拠している説が、二一世紀初頭の現在もみられる。それが、日本語学会のアクセント形成史で「定説」とされている〈自律変化説〉である。」

と述べて、通説を「イデオロギーとしての〈自律変化説〉」と断じ、さらに「戦後のアクセント論の保守本流」「批判することさえタブー視される風潮」「中央が優れ地方が劣るとする「中央史観」「権威主義」等々と痛烈に批判している。これは人類学・考古学等の「関連諸学の最新成果」との整合性を最重視した論であるが、他分野の成果やその理解が盤石である保証もなく（旧石器時代をめぐる捏造事件など記憶に新しいところ）、一研究者が責任を持って論じ得る範囲には自ずと限りがある。ここは、言語史研究の方法論に即し、その範囲内でどこまでが解決可能かを地道に見定める努力が必要のように思う。

ところで、筆者はかつてこの〈一型アクセント古形説〉¹⁾について、「発想の転換を迫る興味深いものであるが、しかし、論理的には通説に一步譲るものと言わねばなるまい」として、その理由をごく簡略に述べたことがある（高山倫明2000）。したがって筆者も「権威主義」者の末席に列せられることになるう（「保守本流」などではとうていありえないが）。ここに再論して旗幟を明らか



図1 『国語学大事典』付録所載全日本アクセント分布図（平山輝男作図）を簡略化

にしておきたいと思う。

2 周圍的分布の解釈

言語の獲得は、周囲を飛び交う音声情報を唯一の手がかりに、個々の幼児の脳内で個別に行われるものであるが、その情報源は通常複数の個体によって発せられた具体的・一回的なパロールの集積である。話者の数だけどこか異なる言語が再構築されると言っても過言ではなく、言語記号の恣意性という、言語を言語たらしめる根本的な性質からして、多様な変化を許容するようにできている。いかなる言語も世代交代等に伴う内的変化を免れることはなく、そのかぎりにおいて言語変化は地域に関わらず等しく進行する。

一方、政治的・文化的上位の地域において生じた言語変化が下位の周辺地域へ地を這うように伝播するのも事実である。その際に顕著なのは、時代に即応した新語のような語彙レベルの伝播（いわゆる借用）であり、たとえば英語起源のインターネット関連用語が音訳・翻訳を通じて世界中に広がるなど、言語間の伝播も通常に見られる。音韻・文法等が、他方言の影響を全く受けないことはあり得ないにしても、語彙レベルでの伝播とはおのずと相違がある点には注意する必要がある。

各地諸方言において内的変化が常時進行するところへ、政治的・文化的上位の地域からの伝播によって外的変化を被るのであり、どちらか一方だけで言語変化が説明できるものではない。

山口幸洋前掲書は、2拍名詞アクセントの型数によって諸方言を一型（A）、二型（B）、三型（F垂井式・E東京式内輪・D東京式中輪・C東京式外輪）、四型（G）に分類し、その分布を「全国方言アクセント体系A B C D E F G F E D C B A分布」としたうえで、

「A一型（無弁別）「前弥生（縄文?）」アクセント言語圏にG五型類聚名義抄アクセント言語が外部から飛び込んでききて、Aがその強力な中央弥生文化を象徴する中央弥生語（原始日本語＝大和言葉）を受け入れるに当たり、初歩的な型の弁別習慣を獲得し確保したのがBであり、そのBが

一段とGを受け入れてCが出来る」(第12章第9節「不対応の方言——もう一つの原始日本語」)

とする。その間、もとのGの体系こそ内的変化によって型の区別を減少させ新たな影響を隣接地域に与えつつ現代京都方言へと向かうものの、周辺地域はもっぱら「Gの絶えざる伝播浸食」によって外的変化を被りつづける。

無アクセント方言話者が型の区別を身につけることの困難さは種々の報告にあるとおりであるが(杉尾宗紀2008 他)²、一方で、言語獲得期にある幼児の脳で処理されれば一代で完全に身につくものでもある(ある言語圏で育てば民族等に関わりなくその言語の母語話者となるように)。しかし、たとえばGに隣接するF地域の話者は、弥生時代から現代に至るまでの長時間にわたって幾世代もの世代交代を繰り返すなかで、「五型」から「四型」に内的変化をおこした中央語Gの型の弁別をB段階・C段階と順次獲得し、そのつど反対側の隣接地域へその成果を橋渡ししながら、自らは現在のところ「三型」までしか獲得できていないことになる。

方言周圏論が内包する中央集権的思想については、その歴史的背景を踏まえた鈴木広光(1993)に優れた考察があるが、地理的変種を伝播に重きを置いて説明しようとする、往々にして、中央にのみ自律的な変化を認め、周辺部はただそれを受け入れ、さらに外側の地域へ順次送り込むだけの透明な存在と考えることになりがちである。これもまた一つの「中央史観」であろう。

「古語が辺境に残る」という言説がある。たしかに、各地の方言の中に古典文学作品に出てくるような古語が今なお命脈を保っている場合は少なくないが、「古語」とは現代中央語では用いられなくなった過去の形式を言うのであるから、それ以外の方言にしか残っていないのは当然でもある。どの方言も(それが方言の範疇に入るかぎり)共通母体の形式を何らかの形で引き継いでいるので、中央語という一方言にも古い形式はたくさん存在する。他のある方言を基準に、そこがたまたま失った形式を中央語を含む他の諸方言に見出すことも必ずや可能である(例えば琉球方言はしばしば古態を残すと言われるが、母音体系などは本土方言の先を行く変化を遂げている)。中央語が、規範

たる責務と書記言語に支えられ、むしろ最も保守的とさえ言える一体系であるのに対し、ここにいう「辺境」は、中央語にはない古い形式を残した方言の総体であって、体系と体系を一对一で比較した上で「古語が辺境に残る」と言っているわけではない点に注意する必要がある。古い形式は辺境にも中央にも多かれ少なかれ継承されるので、冒頭に引いた小泉保（1998）のように、辺境に分布するが故に古い形式だというのは行き過ぎである。

また、遠隔地に同一あるいは類似の形式が分布する場合、それはその中間に分布する形式より相対的に古いとされる。言語地理学的方法論を定式化した M. G. バルトーリの「周辺地域の基準」や、柴田武（1963）の言う「周辺残存の原則」である。これは、言語的交通のない遠隔地に、同じ形式で同じ意味をもつ語が偶然に存在する確率がきわめて低いことを前提に、その合理的解釈として過去の連続性を推測し、結果としてそれを分断する形式を相対的に新しいと認めるものである。言うまでもなく、ここには言語記号の恣意性という大前提がある。周辺部に離れて分布する形式どうしに偶然とは考えにくい有縁性が認められなければ、その中間部との新古関係を積極的に主張することはできない。

3 有縁性の認定基準

〈一型アクセント古形説〉が積極的に支持されるためには、周辺部に離れて分布する無アクセント（一型アクセント）に偶然ならざる有縁性を指摘する必要がある。山口幸洋（1998）の書評である木部暢子（2001）には、拙論の一部を引いて方言圏論的解釈適用の是非を問うた部分があり、それに答える形で、山口幸洋（2003）は以下のように述べる。

「その種の文レベル、全文一本調子「無ポーズ一気」の「全文パターン（一体連続平板調，更新連続平板調，無差別平板調等）」、さらに、部分的な「文頭イントネーション，句間イント～，文末イント～ほか関連の特徴」，境界表示特徴と思われる「文節末下降」，加えて関連する文論的な「話法，不整文」に諸種の共通点がありうる。それが，木部氏も言い，高山氏も言

う「有縁性」に当たると考える。」

以下、この点について考えていくことにするが、それに先だって日本語アクセントのいくつかのタイプを簡単に整理しておきたい。

アクセントには、規則によって決まる部分と、一々の語について記憶されている部分とがある。たとえば東京方言における次のような例は一定の規則によって導かれるもので、どの型におさまるかは予測可能である。

(1) $\overline{\text{ケネディ}} \text{大統領} / \overline{\text{ケネディ}} \text{空港}$

(2) $\overline{\text{ゲブレシラシエ}} / \overline{\text{ゲブレシラシエ}}$

(1) は語構成の相違に応じた複合アクセント規則によって規定されたもので、たとえば「 $\overline{\text{オズワルド}} \text{大統領}$ 」「 $\overline{\text{オズワルド}} \text{空港}$ 」のように初めて見るような組み合わせでも決まった型におさまる。(2) は耳慣れない外国語や無意味音連続にしばしば適用される規則〈- 3 モーラを含む音節主音にアクセント核〉によるものだが、原語の音訳の仕方の違いで、語末がシエのように2拍になるかシェのように1拍になるかで下がり目の位置がずれたものである。

一方、「端」「橋」「箸」の三つのハシが東京方言で

ハシガ (端)、 ハシガ (橋)、 $\overline{\text{ハシガ}}$ (箸)

のように区別されるためには、単語ごとに個別の情報があらかじめ記憶されている必要がある。

コンピュータ上の文字情報を音声に変換して読み上げるソフトがあるが、それは文字列を意味単位に解析し具体的な音声に結びつけて出力するプログラム(規則の束)の部分と、個別の諸情報の入った単語データベースとから成っている。上記の予測可能なアクセントはプログラムによって処理できるが、三つのハシが正しく出力されるためにはデータベースの方で個別に情報を入力しておかなければならない。実際の東京方言アクセントも、種々の規則と、心内辞書に記憶された個々の情報とから成り立っているであろう。膨大な語彙量を考えると心内辞書には必要最小限の情報が効率よく入っているものと想像される。たとえば、

$\overline{\text{アノハシ}}$ (あの橋)、 $\overline{\text{下ノハシ}}$ (どの橋)

のように他の語が前接すると「ハ↑シ」の上がり目が消えて全平となったり、前接語のアクセントによって相対的に「高高」になったり「低低」になったりもする。どうやら、個々の分節音に対応して一々「高」や「低」の情報が貼り付いているわけでもなさそうである。むしろ「上がり目」「下がり目」の位置の情報が重要なようである。その際、

ア↑ノ+ シ↑ロ↓イ+ ハ↑ナ↓ガ+ サ↑イタ+ ヒ

が一音韻句を構成すると

ア↑ノシロ↓イハナ↓ガサイタヒ

となるように、単独で発音される際には各語にあった上昇（↑）は、音韻句の冒頭をのぞいて消えるのが自然である。したがってこの上昇は単語に固有の情報によるものではなく、音韻句の開始位置を示すマーカーとして機能していると考えられる。句音調である。単独で発する際には必須の上昇だが、それは語に固有の特徴の顕現ではなく、一語であっても発話されれば一つの音韻句となり、句音調が現れると考えるべきであろう。

一方、単語にある下がり目（↓）は、助詞「の」の後接や複合規則による場合をのぞけば基本的に消えることはなく、句音調にも、イントネーションにも妨げられることはない。

ソ↓ラガ、イ↓ノチガ、カ↓ミサマガ

ハシガノ（端が？）、ハシ↓ガノ（橋が？）

この、弁別的特徴としての下降を直後に伴う「高」がアクセント核と呼ばれるもので、モーラで数えて何番目に位置するという情報が心内辞書の方で個々に記憶されているものと考えられる。東京方言で個々の語に必要なアクセント情報はこの一桁の数だけであり、数の情報のないものは下がり目のないタイプ（無核型）ということになる。モーラ数が増えたと当然何番目の可能性も増えるので、語の拍数に応じて区別される型の数が違ってくる（ n モーラ名詞には $n+1$ の型がある）。なお、数えて何番目という数は、語頭からでも語末からでも同様に指定が可能だが、たとえば用言の有核型アクセント（ナ↓イ、シロ↓イ、タノシ↓イ、等）や耳慣れない外国語や無意味音連続（ワイナ↓イナ、

コソトノモ↓ヨロ、等)は語頭からでは数が一定しないのに対し、語末から数えれば一つに揃うなど、語末からの逆算指定の方が実際に近いかと考えられている。

また、この数はモーラをカウントした数であるが、アクセントの顕現には音声的な際立ちが必要なため、具体的な音声として出力されるに際してはカウントされたモーラを含む音節主音がアクセントを担っている(音節は、母音一ときにそれに準じたエネルギーをもつ鼻音・流音一を中心に子音が集まり、母音の入りわたり・出わたりの音響特徴の補完によって子音に十分なきこえ(sonority)が保証される音の塊である)。したがって「ワ↓ンジル」「イカ↓ンガー」のような例も〈一3モーラを含む音節主音にアクセント核〉のルールに則っている。

次に、九州西南部に分布する二型式アクセント(長崎・鹿児島など)では、語の長さに関係なく、すべての語が二つの型のうちのどちらかに所属している。たとえば鹿児島方言にはA型・B型の二種のタイプがあり、その語によって統制される音韻句全体の音調が、A型であれば後から2番目の音節のみが高く、B型であれば最終音節のみが高くなる(この方言は非モーラ方言である)。

A型 万^ーぜ、カ^ーゼガ、カゼ^ーマデ、カゼマ^ーデモ

カゴシ^ーマ、カゴシマ^ーケン、カゴ^ーンマ

B型 ソ^ーラ、ソラ^ーガ、ソラマ^ーデ、ソラマデ^ーモ

トーキョ^ーー、トーキョー^ーワン

これは「数えて何番目」ではなく、「どれか」に意味があるものであり、このようなタイプのアクセントは語声調と呼ばれている。とくに二型式の場合は「どちらか」なので、すべての語に何らかの情報が入っている必要はなく、一方が決まれば自ずから他方も決まる。鹿児島の場合は後述のようにA型が有標と思しく、心内辞書においては、A型に属する単語にのみそれと示す情報が入っているものと考えられる。

京阪式アクセントは、東京式とも二型式ともまた異なるタイプである。まず、すべての単語は高く始まる語(高起式)と低く始まる語(低起式)に二分され、

音韻句頭・音韻句中を問わずその特徴は顕現する。

イノチガ、アルイノチガ / イチゴガ、コノイチゴガ

これも、「数えて何番目」ではなく、「どちらか」に意味があるので、この点では二型式と同様の語声調の性質を備えていると言えるが、加えてさらに下がり目の位置も指定されており、この点は東京式などと共通する。語声調によって語が二分され、その各々についてさらに下がり目の位置による型の弁別が行われているので、東京式などに比べると型の区別が多くなる。上記の例でいえば「イノチ」は高起式で3、「イチゴ」は低起式で2（ともに逆算指定）という情報をもっていることになる（高起・低起はどちらか一方の情報があればいい）。

さて、語に固有の情報にもとづくアクセントと、音韻句や文レベルで、規則によって一定の音調に結びつくものとを分けて整理すると以下ようになる。最終的に文として出力される具体的な音調は、これらの重層したものと考えられる³。

（1） 狭義のアクセント：語に固有の情報の、有無や相違によって弁別されるピッチの変動

（2） 音韻句の音調：シンタグマ・マーカ―としてのピッチの変動

（3） イントネーション：文の陳述に関わるピッチやストレスの変動

このうち（1）は、語の意味や音素配列その他から予測できるものではなく、たとえば東京方言では、端：φ、橋：1、箸：2、のような心内辞書中のアクセント情報の有無や相違に応じて、三つのハシがそれぞれ他から区別されている。ただし各語とそのアクセントの間に必然的な関係があるわけではなく、たまたま東京方言でそうになっているだけである。諸方言で種々の異なる音調が現れ得る所以であるが、にもかかわらず、東京方言で同じアクセントをもつニワ（庭）・トリ（鳥）・エダ（枝）等々が他方言でもやはり同じグループをなし、イシ（石）・カワ（川）・テラ（寺）等々にも、マツ（松）・カサ（笠）・カタ（肩）等々にも同様のことが言える。語とアクセントの恣意的な関係の中に偶然ならざる対応関係が見て取れるという事実は、たまたま同じアクセントを持っていた共通の体系から諸方言が種々に異なる変化を遂げて今日に至っていることを

如実に物語っている。

表 1 2 拍名詞の型の対応

	盛岡	東京	京都	小倉	博多	鹿児島
にわ とり えだ たけ さけ 庭・鳥・枝・竹・酒 …	ニワガ	ニワガ	ニワガ	ニワガ	ニワガ	ニワガ
いし かわ てら うた むね 石・川・寺・歌・胸 …	イシガ	イシガ	イシガ	イシガ	イシガ	イシガ
やま いぬ くさ いけ うで 山・犬・草・池・腕 …	ヤマガ	ヤマガ	ヤマガ	ヤマガ	ヤマガ	ヤマガ
まつ かさ かた たね ふね 松・笠・肩・種・船 …	マツガ	マツガ	マツガ	マツガ	マツガ	マツガ
さる むこ ふな あめ こえ 猿・婿・鰯・雨・声 …	サルガ	サルガ	サルガ	サルガ	サルガ	サルガ

(2) の音韻句の音調は、線状的な音声連続を有意味なまとまり（裏からいえば意味の切れ目）に分節し統制するための音声上の方策、すなわちシンタグマ・マーカ―として位置づけられる。それは、音縮約、母音調和、性数一致、呼応、等々、言語によって種々の方法が考えられるが、日本語ではピッチの変動がその役目を多く果たしている。たとえば「木からオチテクビを折った」は、ポーズなしでもピッチの配列次第で「落ちて、首」にも「落ち、手首」にもなる。「お腰につけた黍団子」もピッチ次第で「興米・煮付け・焚火・団子」という単語の羅列になる。書記言語における読点や漢字表記が持つような機能がピッチの変動によって行われているわけで、東京方言における音韻句頭の「低高」の上昇、広島方言の同じく「低低高」の上昇、宮崎県都城方言の音韻句末に現れる上昇、北陸方言の音韻句末に現れるうねり音調、等々が同様の機能を果たしていると考えられる。なお、東京方言の音韻句はかなり長くすることも可能だが、鹿児島や都城の音韻句はいわゆる文節に近い単位で切れ、相対的に概して短い。しかし、前者の音韻句頭の上昇、後者の音韻句末の上昇は、ともに心内辞書で個々の語に貼り付いた情報によるものではない点で共通している。

シンタグマ・マーカ―は、線状的な音声連続を有意味なまとまりに分節し統制するという、合目的的なものである。山口幸洋（2003）が「諸種の共通点がありうる」として指摘した諸特徴の多くはこれであり、語ごとに弁別されるア

クセントがない中で効率よく目的を果たすとしたら、自ずと方法は限られてくる。各地域で個別に相似の方策が選択される可能性は決して低くはない。

(3) のイントネーションにはある程度の普遍性が認められる。もちろん言語に固有のものに起因する誤解・摩擦の報告例も少なくないが、言葉の理解できない外国映画などを見ている、平叙・疑問・感嘆・命令等の基本的なところはだいたい理解できそうである。たとえば平叙が概して文末の下降に結びつくのは音声学的な自然下降がシンボライズされたものであろうし、疑問はその自然下降に逆らう上昇調で音声を切ることによって未完結性が示され、聞き手にその完結が委ねられた格好になるのであろう。こうした合目的な方策を有縁性で結びつけるのは、やはり避けるべきであろう。

有縁性の認定基準は、合目的な部分ではなく恣意的な部分に、あるいは、規則によって導かれる部分ではなく心内辞書に記憶される個別情報の部分に、対応が見られるか否かである。

4 九州方言アクセントとその分布

最後に、九州諸方言アクセントの通時的な関連性を考えてみる。

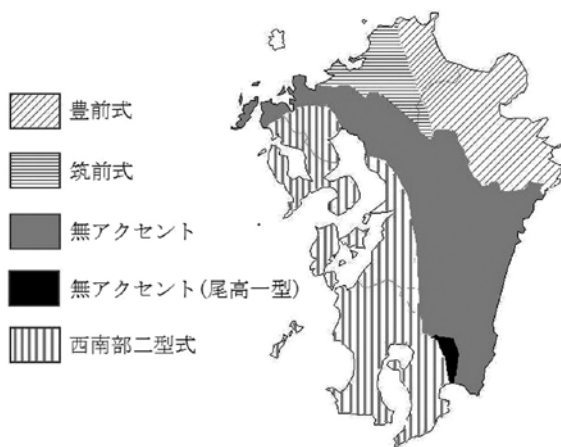
まず、九州東北部に分布する豊前式アクセント（小倉など）は、アクセント核の有無とその位置が弁別的であり、そのしくみにおいては東京式と変わるところがない。ただ、同一情報を持っていた語が東京式とは異なる方向で一斉に変化を起こしたとみえて、アクセント型の所属語に規則的な異同がある。その対応関係は、比較方法に照らして、豊前式から東京式への変化も、その逆の変化も想定し難いものである。たとえば豊前で無核型の2拍名詞「庭・鳥・石・川…」は東京では一部が無核型、一部が有核型となる。一方、東京で有核型の「石・川・山・犬…」は豊前で一部が無核型、一部が有核型となり、どちらを原型に据えても語類の分裂の契機を説明するのは困難である。しかし、さらに複雑な構造をもつ京阪式アクセントから、それぞれが別個に変化したものと想定すれば合理的な説明はつく。豊前式は南北朝期に京都で起こった語頭隆起による体系変化より前、東京式は体系変化後の体系からそれぞれに変化したもの

と考えられている。豊前式・東京式ともに、京阪式アクセントが持っている語声調の情報を失い、アクセント核の位置の情報のみを残している。

豊前式に隣接する筑前式アクセント（博多など）は、無核型と有核型の区別がなく、豊前式や東京式では区別のある語末核の有無が弁別されない。たとえば「日^ひが／火^ひが」「端^{はし}が／橋^{はし}が」がそれぞれ同音に帰している。用言もアクセント的に二分されないなど、豊前式・東京式よりシンプルになっているが、単語ごとにアクセント核の位置に関する数の情報が記憶されている点では同じであり、型の所属語にも対応関係がある。これは豊前式からの変化と考えるのが自然であろう。

西南部二型式アクセントにおける二つの語類は、類聚名義抄式の高起・低起に対応していることが知られている（木部暢子2000）。京都では南北朝期に語頭隆起による体系変化があり、高起・低起の一部の語類の融合が起こっている。西南二型式は、南北朝期以前の体系からアクセント核の位置の情報を失い、語声調の情報だけを残して今に至っていると考えられる。

鹿児島方言に隣接する都城方言には、尾高一型アクセントと呼ばれるものがある。鹿児島方言のB型のように、音韻句の最終音節だけが高くなるというものである（この方言も非モーラ方言である）。一つの定まった型があるという意味で「一型アクセント」と称されるが、心内辞書に判で押したようなアクセント情報が入っている必要はなく、音韻句に関する規則で一定の音調を指定すればそれでいい。語に固有の情報がない点では隣接して広がる宮崎・熊本等の無アクセントと同じである。語に固有の情報によるもののみをアクセントと呼ぶならば、一型アクセントというものはないことになる。都城の無アクセントは、隣接する鹿児島の二型式のうちA型が持っていた語声調情報が失われ、尾高の音韻句の音調のみが機能しているものであろう。翻って考えれば、鹿児島方言のB型も、有標のA型に対して無標の音調が顕現したもので、音韻句の音調と見てよかろう。



さて、西北部から東南部にかけて、九州を袈裟懸けに分布する無アクセントであるが、これは東北側の筑前式・豊前式と西南側の二型式をきれいに分断している。そして、分断された両者の間には、前掲の表にも明らかなように、語に固有の情報において対応をみせている。語とアクセントの恣意的な関係の中に見いだされる偶然ならざる対応である。こういう場合は、他ならぬ言語地理学的解釈のセオリーに従って、中央部に分布する無アクセントを相対的に新しい勢力とみなすべきであろう。

筆者は旧稿において「一型アクセント古形説が正鵠を射ている可能性を否定するものではないが、学問は結果の当否よりも論証過程だと思う」（高山倫明 2000）と述べたが、再度くりかえして稿を終えることにする。

御批正賜れば幸いである。

注

- 1 山口氏の「一型アクセント＝原始日本語アクセント説」、杉崎氏の「他律変化説」に相当するが、ここでは原始日本語や言語の他律的な変化全般を問題にはしないので、一型アクセントが相対的に古い形式であるという主張を仮にこう呼んでおく。「無アクセント」「一

- 型アクセント」の呼称については第4節参照。
- 2 1981年4月現在のNHK全国アナウンサー545人のうち東京出身者が232名を占め、福島県出身者は2名、宮崎県出身者は0名という報告もある（菅野謙・最上勝也「NHKアナウンサーのアクセント変化」『国語学会昭和56年秋季大会要旨』於広島大学1981）。
 - 3 アクセント・音韻句の音調・イントネーション間の力学は方言によって異なる可能性がある。たとえば東京方言においては、アクセントは句音調やイントネーションより上位にあってそれらに侵されることがないが、福岡市方言では疑問詞句内のアクセント核が消去され、結果的に疑問の上昇が語の下がり目を消しながら文を覆うような様相を呈する（当該方言における核の消去規則については早田輝洋1985、久保智之1989など参照）。

《文献》

- 川上 泰（1995）『日本語アクセント論集』（汲古書院）
- 木部暢子（2000）『西南部九州二型アクセントの研究』（勉誠出版）
- 木部暢子（2001）「〔書評〕山口幸洋『日本語方言一型アクセントの研究』」『国語学』第52巻4号
- 久保智之（1989）「福岡市方言の、ダレ・ナニ等の疑問詞を含む文のピッチパターン」『国語学』156
- 小泉 保（1998）『縄文語の発見』（青土社）
- 柴田 武（1963）「オタマジヤクシの言語地理学」『国語学』53（同『方言論』平凡社 1988所収）
- 杉尾宗紀（2008）「無アクセント地域からアナウンサーに～私の東京アクセント習得体験記～①」『日本語学』第27巻12号。※以後、同誌において②中村 宏、③二宮正博、④石川循一、⑤野方正俊、⑥柴田 徹、の諸氏による興味深いリレー連載がある。
- 杉崎好洋（2008）「人類学、考古学は日本語アクセント分布とどう関わるか（三）－イデオロギーとしての〈自律変化説〉－」『山口幸洋博士古希記念論文集 方言研究の前衛』（桂書房）
- 鈴木広光（1993）「日本語系統論・方言圏論・オリエンタリズム」『現代思想』21-7
- 高山倫明（2000）「日本語音韻史の方法」『日本語学』第19巻11号
- 早田輝洋（1985）『博多方言のアクセント・形態論』九州大学出版会
- 山口幸洋（1998）『日本語方言一型アクセントの研究』（ひつじ書房）
- 山口幸洋（2003）「木部暢子氏の「書評」を読んで」『国語学』第54巻1号
- E・コセリウ『言語地理学入門』柴田武、W・グロータース共訳（三修社）